（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	Bhatte Pallavi Kamlakar
論文題目	VOICES OF THE WIND: CONVERGENCE OF DIVERSITY IN THE TRANSNATIONAL DOMAIN OF PURSE, HEADS AND IDEAS IN THE CONTEXT OF THE INDIAN FREEDOM STRUGGLE（インド独立運動における超領域的諸相）		

（論文内容の要旨）

本博士学位申請論文は、20 世紀前半における、移民、留学、亡命などの理由によってインド本国以外の地域に在住したインド人による、インド独立の運動を、日本、イギリス、フランス、ドイツ、エジプト、アメリカおよびその他地域にも広がるネットワークの中で論じたものである。

第１章‘Introduction’は、インド独立闘争およびその研究史の概観である。既存の研究は、ケンブリッジ学派（帝国史学派）、ナショナリスト、マルクシスト、サバルタン学派の主要な４つのカテゴリーに分類されるが、海外における運動はいずれの場合にも著しく等閑視されてきたとする。

第２章‘Indian Revolutionaries and the Rising Sun’ は、第二次大戦期におけるスバス・チャンドラ・ボースの来日と、ボースを指導者として発足したインド臨時政府およびインド国軍と、日本政府および軍部の協力関係の形成から始まるが、さかのぼって、初期からの、すなわち1905年日露戦争における日本の勝利の時期以降について、初めインド人留学生によって行われ、後に革命家ラス・ビハリ・ボースによって発展された、運動の組織化、機関紙・誌の発行などの運動を概括し、日本がアジアにおける運動の中心であったことを論じている。

第３章‘Age of Indian Renaissance’は、「インド・ルネッサンス」時代と称される時期、すなわち第一次インド独立戦争以後、インドにおいて工業化が開始され、企業家、官僚などのエリート中流階級を構成するインド人が出現した19世紀後半の時期の運動を検討して、アーリヤ・サマジ、ブラーモ・サワジなどの復古主義的性格をもつ宗教・社会運動団体の形成と発展のあとをたどる。くわえてインドにおける愛国心・ナショナリズムの高揚の背後に、ヨーロッパ人、インド人いずれの側からものインドの歴史の再発見があったことを指摘する。

第４章‘Studies in the Heart of the Empire’は、ヨーロッパにおける独立運動においてロンドン、パリ、ベルリンなどのヨーロッパ主要都市が、インド出身の留学生、知識人、亡命者が運動を展開するための格好の拠点として機能した事情を明らかにする。とりわけ、「帝国の心臓」であるロンドンで、シャムジ・クリシュナヴァルマが設営したインディア・ハウスは、インド人留学生に住居をあたえ、また機関紙 *Indian Sociologist*の発行所となるなど、活動の重要拠点となった。インディア・ハウスの運営は後にＶ．Ｄ．サヴァルカルに継承され多くの活動家を輩出したが、活動家の一人がイギリス人下院議員暗殺事件をおこしたことで閉鎖され、活動家はパリやベルリンなどに四散して、同様の活動拠点を築くことになる。

第５章‘Forging Collaborations with Egyptian & Irish Nationalists & Garnering German Support’では、1882年以後、事実上イギリスの保護国化していたエジプト、およびイギリスからの独立運動を展開していたアイルランドの革命家との、ロンドンを舞台とした協力・連携関係の形成のための活動を扱い、さらに、イギリスとの敵対関係を深めていたドイツ人からの軍事的支援の獲得について視野を拡大して、インド独立運動の多面的な展開を例証している。

第６章‘North American Dimensions’は、ロンドンのインディア・ハウスからアメリカ合衆国に移動した活動家ハル・ダヤルを中心に、西海岸のサン・フランシスコにおいて結成された革命組織ガダル党の運動を扱う。またその結成の契機となった、鉄道建設労働者として移民する予定であったインド人が、同じ帝国内領土間の移動であるにもかかわらず、カナダのヴァン・クーヴァーにおいて上陸を拒否され送還された、1914年のいわゆる「駒形丸事件」についても考察が加えられている。ガダル党の運動文書やヒンディ語ウルドゥ語等による出版物は、合衆国内においてのみならず、日本や中国沿岸部各都市、東南アジア、さらにはインド国内においても配布され、支部もそれらの各地に設置されて、太平洋の両岸においてインド独立運動につよい影響をあたえたことが論証されている。

第７章‘Conclusion and Further Research’は第１章から第６章までを総括して終わる。

（　続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本博士学位申請論文は、インドが英国統治下にあった20 世紀前半における、海外在住インド人による独立運動を、日本を初め、イギリス、フランス、ドイツ、エジプト、アメリカその他地域にも広がる運動のネットワークの中で論じたものである。

インドの独立は、インド国民会議のマハトマ・ガンディーが、非暴力・不服従を提唱してねばりづよくつづけられた国内の運動が、第二次大戦の終結後に結実して、旧宗主国イギリスとの交渉の後、その了解を得て平和的に達成された。しかし独立に至るこの公式の見解が、インド独立の歴史のすべてというわけではなく、特に本国においてまったく閑却され黙殺されている、武力の行使をも視野に入れた独立闘争をも含めた、国内外の革命的な独立運動をあわせて論じて、初めて歴史のリアリティを獲得することができるという明確な問題意識にささえられて、本研究は構想されている。

海外におけるインド独立運動は、日露戦争における日本の勝利、インドにおけるベンガル分割問題、そしてロンドンにおけるインディア・ハウスの設立といった、それぞれに次元の異なる三つのできごとが、偶然に継起した1905年という年に発端を有する。日露戦争の結果は、アジアの国が欧米の強国と戦って勝利をかちえうるという事例を目前に示してアジア各地の民族主義を鼓舞したが、インドにおいてもベンガル分割問題をめぐって強硬路線を主張した国民会議の非主流派（左派）の一部は、インドを出国しロンドンのインディア・ハウスを運動拠点として、「帝国の心臓」における活動を開始する。

上記の例でも見られるように、運動は、世界で同時に発生し進行しているさまざまな事件や動向ともつれあい、絡みあいながら展開された。申請者はこれを「トランスナショナル」な運動と規定し、この1905年前後から独立まで（正確には、第二次大戦期の日本と英国の交戦に乗じて、日本政府・軍部の支持によってインド共和国臨時政府大統領に就任した独立運動の闘士チャンドラ・ボースが、大戦終結の直後に飛行機事故のために台湾上空で行方不明になるまで）の期間の運動を、「トランスナショナルな空間」における「単一の運動」としてとらえ、その間の運動の推移を、日本、ロンドン、パリ、ベルリン、サン・フランシスコと焦点を移動させながら、ひとつながりのものとして叙述した点に本研究の最大の特色がある。

そもそもインド独立の運動が国境の外側で行われること自体、越境的であるのだが、申請者が一貫してこのトランスナショナルという視点にこだわるのは、運動において、トランスナショナルな空間において初めて可能になるような局面が、ほかにもさまざまに存在すると考えるからである。それはたとえば、犯罪情報局（CID）などイギリス政府の治安機関の監視下におかれ、時として捜索を受けることもあった運動拠点が、いざとなれば、国境を越えて移動しつつ運動を継続することが可能になることであり、またホスト国の政府・政治家や、有力者・知識人の間に運動への理解と共感を広げたり、国際情勢の変化をたくみに利用して、宗主国であるイギリスに敵対する国家（たとえばドイツ）との連携をはかり、資金やとりわけ武器の援助を受ける機会が得られることでもある。また同様に、イギリスからの独立を希望している帝国領土内の他の民族（たとえばアイルランドやエジプト）の活動家同士の連帯を形成することも可能となったし、また世界各地の広がった拠点間で、人、資金、情報の交換を行うことによって、それぞれの地域での経験とリソースを蓄積していくことが、この空間のなかで可能にもなった。さらに運動と並行して、独立後の国家形成に不可欠な科学技術や近代的な法律・政治制度などを、同時に習得する機会が得られることもあった。これらを各地域での運動を扱ったそれぞれの章において、公安資料や運動の側の出版物など、豊富な資料を利用しながら、論証することに本論文は成功しているといえる。

各地で展開されたトランスナショナルな運動のうち、インドの独立への機運を高めることに直接的に最も貢献したのは、アメリカで行われたガダル党の運動であったと申請者はみなしているようであるが、上述のような視点からは、ガダル党の指導者であったハル・ダヤルの思想と運動理論を形成したロンドンのインディア・ハウスこそが運動の軸として重要に思われる。しかし、運動を、変形し移動しながら継続されてゆくものと見る、トランスナショナルな運動という見地からすれば、そうした差異もあまり意味はないともいえよう。

本論文は、第二次大戦期まで扱うとし、確かにチャンドラ・ボースの活動についての記述から開始されてはいるが、論文のほとんどが第一次大戦終結までの期間の運動の分析にあてられており、1920～30年代については比較的手薄であるきらいがある。「単一の連続した運動」という視点をつらぬくのであれば、この空白を埋める作業も必要であろう。こうした不満はあるが、本申請論文が、従来の研究の沈黙を補なうものであり、かつインド独立運動の歴史への新たな視野を切り開くものであることは間違いなく、高く評価することができる。

以上のことから、本論文は博士（人間･環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成26年２月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規定第14条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版事情が許すまで、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認めた。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降